

野木町指定文化財の追加指定

令和3年10月28日に行われた野木町教育委員会において、野木町野木の満願寺(まんがんじ)にあります「銅造観音菩薩立像」(どうぞうかんのんぼさつりゅうぞう)、1軀(く)が野木町指定文化財有形文化財工芸品の部に指定されました。

この観音菩薩立像は、頭部に八角形の宝冠(ほうかん)をのせ、左肩から右腋(わき)に条帛(じょうはく)をかけ、一段折り返しの裳(も)に腰布をつけています。両手は右手を上、左手を下にして梵篋印(ぼんきょういん)を結び、両足をやや広げて立っています。宝冠の正面には化仏(けぶつ)、その左右の2面には宝相華文様(ほうそうげもんよう)が浮彫り風に彫られています。

像の大きさは、像高32.5cm、髪際高(はっさいこう)28.4cm、臂張8.3cm、裾張5.8cm。

この像の品質・構造について、像は銅造で、下の柄(ほぞ)は中央前面両足に1本。頭部には鉄芯を抜いた小穴があり、両肩先を別鑄にするほか、本体部は前後の合わせ型で一鑄仕上げています。おそらく、同一の鑄型からいくつも鑄出したものかと思われます。

保存状態ですが、阿弥陀如来立像(あみだにょらいりゅうぞう)、勢至菩薩立像(せいしぼさつりゅうぞう)はなくなっています。光背(こうはい)も欠失。台座もなくなり、別なものを台座として充てています。宝冠の5面はヤスリ状のもので削られた痕跡があり無文となります。両耳もヤスリ状のもので削られています。全体的に衣文線の彫りは深いですが、宝冠から顔面にかけての彫りが浅く、かなり摩滅しています。全体的に摩滅が著しくなっています。

伝来・来歴について、満願寺は、元和2年(1616)、現在の地、本野木の金剛院跡(こんごういんあと)に建てられ、野木神社の別当寺(べっとうじ)として成立しました(平成元年 野木町史編さん委員会『野木町史』歴史編576頁)。満願寺関係の資料や聞き取り調査をしても、本像の伝来や来歴は未詳です。

製作年代は鎌倉時代後期から南北朝期、14世紀から15世紀頃の製作と考えられます。



満願寺 銅造観音菩薩立像

